

村上春樹「1973年のピンボール」論

— 隴化された三角関係 —

山根 由美恵

序 問題の所在

「1973年のピンボール」は、村上春樹の第二作目の長編として『群像』昭和五五年三月号に掲載された。「風の歌を聴け」の後、期待され待ち望まれた作品であったが、失敗作として受け止められた。その要因は、「僕」の絶望感の内実が曖昧、「鼠」の自意識の病の原因が不明、粗筋が捉えにくいために主題が不明瞭という点が挙げられる。そしてこれらの先行研究は二つの傾向に分かれる。一つは、3フリーツパーのスペースシップを「直子」と同化させ、主題を「直子」の隠喩であるピンボールを探す（seek-and-find）の物語とするものである。今一つは、「僕」が主人公の章と「鼠」が主人公の章が交互に語られていく構成と、「これは「僕」の話であるとともに鼠と呼ばれる男の話でもある」（1969—1973）を根拠として、「僕」と「鼠」の物語として読む論考である。³⁾

先行研究ではこのように、主人公「僕」との関係を「直子」「鼠」のどちらに重点を置くかによって読みが決定されてきた。そして、どちらの立場もテキストを「風の歌を聴け」「1973年のピンボール」

「羊をめぐる冒険」という三部作の第二部として位置づけていた。しかし、「僕」と「鼠」とそして「直子」の物語とを結ぶ有機的な糸があるのではないのか。

本稿では、「僕」と「直子」の物語、もしくは「僕」と「鼠」の物語と読まれてきた「1973年のピンボール」を「僕と鼠と直子」の三角関係の物語として読むことを第一の目的とする。そして、失敗作であるとされた要因がむしろ新しい認識システムの（物語）を形成しているのではないかと思われるのである。そのことも明らかにしたい。

一 三年前の焦点化

「僕」と「直子」の物語は先述の先行研究と重なるところが多くあるので、その要点のみを簡単に述べることにする。「僕」の章は、直子との過去をひきずった「僕」が1973年現在でも未だにその場所から抜け出られず、他者と関わることでできない閉塞感を伴いながら展開する。そして、過去に捕らわれすぎて外部との接触が取れなくな

ってしまった「僕」の暗喩として配電盤が登場し、この配電盤の葬式という出来事を通じて、「僕」は「直子」との過去を会社の女性に次のように語る。

「僕は不思議な星の下に生まれたんだ。つまりね、欲しいと思つたものは何でも必ず手に入れてきた。でも、何かを手に入れるたびに別の何かを踏みつけてきた。わかるかい？」

「少しね。」

「誰も信じないけどこれは本当なんだ。三年ばかり前にそれに気づいた。そしてこう思った。もう何も欲しがらまいってね。」(12)

「僕」は「直子」を手に入れるために別の何かを踏みつけた。そして、三年前1970年に直子は死んでしまった。自分が何かを踏みつけたことを語った時から中心モチーフであるピンボールをめぐる物語が始まる。「僕」はピンボールを彼女と呼び、そこで自らの「直子」との過去を反芻していた。しかし、この癒しは途中で終わったため、「僕」は1973年に自らの存在の確認を賭け、3フリツパーのスペースシップを探す。彼女との再会に際し、「僕」は次のように会話をす。

ずいぶん長く会わなかったような気がするわ、と彼女が言う。僕は考えるふりをして指を折ってみる。三年つてとこだな。あつという間だよ。(22)

三年前に「直子」が死に、「僕」はピンボールゲームにのめり込むことよって「直子」を失った痛手を忘れようとした。「僕」は「スペースシップ」との再会を「三年」ぶりとしている。ここで、「スペースシップ」は単なるピンボールマシンではなく「直子」そのものになつていることは明白である。

ここで強調したいのは、「僕」が語る過去(1969-1973、5、12、15章)は全て「直子」と過ごした1969年と三年前(1970年)の出来事であり、その中でも三年前が中心となつてのことである。物語は「直子」との過去が終っていないと自覚した「僕」が出口を求めて始まった。「僕」の章の後半のモチーフ、ピンボール探しも「直子」との過去に決着を着けるための行動であった。「僕」の章は「直子」と死に別れた三年前へ焦点化されているのである。

さて、先行研究では、「鼠」の存在を「僕」との関係性のみ目を向け、「僕」の閉じられた自意識、分身等と捉えていた。

「僕」の話から捨象されている具体的な「故郷」の幻想との葛藤を「鼠」の話が補完し、「鼠」の話に欠けている自身の外部のコードとの関係を凝視し対象化するメタ・レヴェルの視線を「僕」の話が補完する。こういった二つのストーリーがパラレルに進行していく過程でいわば残像現象のように成立し、競争しあつて自意識の物語が織り上げられていくことがテキストの戦略として企てられていたのである。すでに述べてきたように「鼠」は、「僕」が幻想を相対化して「出口」に向かう「教訓」を残すため、自滅する用意された犠牲者としての閉じた自意識であった。

そして、「鼠」が「僕」の分身であることは定説となつている。しかし、「1973年のピンボール」における「鼠」という存在には、「僕」の分身という関係に留まらない記述が存する。

これは「僕」の話であるとともに鼠と呼ばれる男の話でもある。

その秋「僕」たちは七百キロも離れた街に住んでいた。

(1969—1973)

ここで「僕」たちは七百キロも離れた街に住んでいた」と「僕」と「鼠」との関係を別の場所に存在する人物として設定していることに留意したい。これまで「1973年のピンボール」は、三部作の第二部として論じられてきた。しかし、このテクストのみで考えた場合、「鼠」は「僕」の分身・自意識の像というよりはむしろ他者として描かれていることに気づく。

この別人物としての「僕」と「鼠」は、双方とも三年前に生き方と関わる重大な出来事に遭遇した。「僕」にとつての三年前とは、「直子」と死に別れた1970年であり、「直子」の死によつて、「僕」は他者とコミュニケーションを取ることができない人間となる。

そして、「鼠」にとつて三年前とは、

鼠にとつて時の流れがその均質さを少しずつ失い始めたのは三年ばかり前のことだった。大学をやめた春だ。

鼠が大学を去ったのにはもちろん幾つかの理由があった。その幾つかの理由が複雑に絡み合ったままある温度に達した時、音をたててヒューズが飛んだ。そしてあるものは残り、あるものはじき飛ばされ、あるものは死んだ。(中略)

もう三年も前のことになる。(2)

「鼠」は「僕」の分身であるという先入観を排除したとき、右の場面は「僕」の過去と「鼠」の過去がそれぞれ別個のものとして語られているのではなく、「僕と鼠と直子」の物語として語られていることに気づく。「僕」は何度も繰り返して、三年前を強調していた。その同じ三年前に「鼠」にも大事件が起こっていた。「その幾つかの理由が

複雑に絡み合ったままある温度に達した時、音をたててヒューズが飛んだ。そしてあるものは残り、あるものはじき飛ばされ、あるものは死んだ。三年前「僕」はそのまま残り、「鼠」は大学を辞め、「直子」は死んでいる。

「僕」と同じように「鼠」も三年前から時の流れが断ち切られたように感じたまま1973年現在に至っている。「鼠」の章は、自分が日に日に腐っていくことを感じ続けている「鼠」の自意識の病と、「街」からの脱出を熱望する姿が描かれていく。ここで、「鼠」の章の結末部、「鼠」が街を出ていく決意をした場面に注目したい。

目を閉じた時、耳の奥に波の音が聞こえた。防波堤を打ち、コンクリートの護岸ブロックのあいだを縫うように引いていく冬の波だった。

これでもう誰にも説明しなくていいんだ、と鼠は思う。そして海の底はどんな町よりも暖かく、そして安らぎと静けさに満ちているだろうと思う。いや、もう何も考えたくない。もう何も……。

(24)

「もう誰にも説明しなくていいんだ」の指示内容は次である。

大学をやめた理由は誰にも説明しなかった。きちんと説明するには五時間かかるだろう。それに、もし誰か一人に説明すれば他のみんなも聞きたがるかもしれない、そう考えただけで鼠は心の底からうんざりした。(2)

大学を辞めたことを「もう誰にも説明しなくていいんだ」と語る「鼠」の姿は三年前大学を辞めたことが心の重圧であったことを物語っている。この痛手から解放されたことを最後の場面で「鼠」に語る

せている。つまり、「鼠」は三年前大学を辞めたことに対する痛手からの解放を求めて街からの脱出を試みていたのである。この「鼠」の章も「僕」の章と同じように三年前に全て焦点が合わされている。以上のことから、「僕」と「鼠」と「直子」とに何らかの関係があり、三年前（1970年）「直子」は死に、「鼠」は大学を辞め、「僕」は友人と恋人を両方失い孤独な季節を送った過去、「僕と鼠と直子」の物語が描かれているように思われてくる。一つの仮説である。

二 「僕と鼠と直子」の物語

「僕と鼠と直子」の物語という仮説を、「僕」の友人の不在、「鼠」とピンボールとの関係、「僕」と「鼠」の対女性意識の三点から検証していきたい。

「僕」は直子が死んでから孤独な季節を送る。この孤独には友人の不在が強調されている。

「そうだ。でもね、世の中には百二十万くらいの対立する考え方があるんだ。いや、もっと沢山かもしれない。」

「殆んど誰とも友達になんかなれないってこと？」と209。

「多分ね。」と僕。「殆んど誰とも友達になんかなれない。」(1)

僕にとってもそれは孤独な季節であった。家に帰って服を脱ぐたびに、体中の骨が皮膚を突き破って飛び出してくるような気がしたものだ。僕の中に存在する得体の知れぬ力が間違った方向に

進みつづけ、それが僕をどこか別の世界に連れこんでいくようにも思えた。

電話が鳴る、そしてこう思う。誰かが誰かに向けて何かを語るうとしているのだ、と。僕自身に電話がかかってきたことは殆んどなかった。僕に向って何かを語るうとする人間なんてもう誰ひとりいなかったし、少くとも僕が語ってほしいと思っていることを誰ひとりとして語ってはくれなかった(5)

「僕」はなぜここまで周囲との孤立、友人の不在を強調するのか。この友人の不在は恋人に死なれた男の状況としては不自然すぎるほどの強調がなされている。恋人が死んだからといって、友人を遠ざける必要はない。しかし、「僕」は友人を遠ざけ、また友人も「僕」を遠ざけている。ここには倫理的・道徳的な問題があったことが想起され、「体中の骨が皮膚を突き破って飛び出してくるような気がしたものだ」という底知れぬ絶望感・苦悩と呼応する。

これと関連して、罪の意識もテキストに存在する。先にも見たように、12章では、欲しいと思った物を手に入れた時、別の何かを踏みつけた「僕」が「直子」が死んだ1970年以降何も欲しがらまいと決意した場面が描かれていた。欲しいものを手に入れた時「別の何かを踏みつけてきた」という表現は、「僕」が「直子」を手に入れる時、別の何かを踏みつけたということになる。ここで何かを踏みつけた事実が「僕」の心に重くのしかかっていることを強調しておきたい。そして、次例はテキストに流れる罪の意識が女性との関係に起因すると推測されるものである。

あなたのせいじゃない、と彼女は言った。そして何度も首を振

った。あなたは悪くなんかないのよ、精いっぱいやったじゃない。

違う、と僕は言う。左のフリッパー、タップ・トランスファー、九番ターゲット。違うんだ。僕は何ひとつ出来なかった。指一本動かせなかった。でも、やろうと思えばできたんだ。

人にできることはとても限られたことなのよ、と彼女は言う。

そうかもしれない、と僕は言う、でも、何ひとつ終っちゃいない、いつまでもきつと同じなんだ。リターン・レーン、トラップ、キック・アウトホール、リバウンド、ハギング・六番ターゲット……ポーナスライト。121150、終わったのよ、何もかも、と彼女は言う。(15) (*傍線は原文にあり)

ここには、「僕」と女性との間に何らかの障碍があったことが推測され、「違うんだ。僕は何ひとつ出来なかった。指一本動かせなかった。でも、やろうと思えばできたんだ」という「僕」の罪の意識が顕著に表れている。

次に「鼠」とピンボールとの関係について触れたい。「僕」がピンボールにはまりこむ前に3フリッパーのスペースシップに夢中だったのは「鼠」であった。

一九七〇年、ちょうど僕と鼠がジェイズ・バーでビールを飲み続けていたころ、僕は決して熱心なピンボール・プレイヤーではなかった。ジェイズ・バーにあった台はその当時としては珍しい3フリッパーの「スペースシップ」と呼ばれるモデルだった。(中略)鼠がピンボールに狂っていたころ、92500という彼のベスト・スコアを記念すべく、鼠とピンボール台の記念写真を撮らされたことがある。(13)

そして、「僕」は「鼠」が夢中になっていたピンボールマシンをわざわざ探し出し、半年間没頭する。「機械はやっとみつけた3フリッパーの「スペースシップ」、ジェイズ・バーと全く同じモデルだった」(15)。「僕」より先にピンボールに夢中だったのは「鼠」であった。

ピンボールへの関心は「鼠」から「僕」へ移る。このピンボールは直子と同じように「僕」の前から突然姿を消した。これまでに述べてきたように、「僕」にとつて3フリッパーのスペースシップは「直子」そのものであった。「僕」が「鼠」の夢中になっていたピンボールをわざわざ探し出し、そのみに熱中するという繋がりには、「僕」のみならず「鼠」にとつてもピンボールの意味するものが一致してくる。

そして、「僕」が夢中になっている時期と「鼠」のそれとは完全にズレが生じていることを強調しておきたい。意味するものが同じであるが、その時期にズレがあることは、分身や自意識の像という関係とは考えにくいのではないだろうか。

最後に、「僕」と「鼠」の対女性意識が共通していることを指摘したい。「僕」と双子は「目を覚ました時、両脇に双子の女の子がいた」(1)という状況で突然の出会いをし、共同生活が始まる。そして、「僕」は双子と配電盤の葬式をするという行動を通して、ピンボールとの再会という目的を見いだし、それに自らの存在の確認を賭ける。過去との訣別を果たした「僕」に双子は突然別れを告げる。「僕」は「寂しい」と語るのみで、その別れを静かに受け入れる。

「鼠」の場合、女の存在が次第に重要なものとなってくる。「鼠」は女との関係にはまりこむ。しかし、「鼠」は宙ぶらりんな状態から抜け出られる可能性のあった女との関係を自ら破壊する。女が自分自

身の存在に深く食い込んでくるようになる、「鼠」は身を引いた。愛することへの恐怖がその裏に隠されている。

「僕」と「鼠」の章は、同じ状況設定、女性との出会いと別れが描かれている。「僕」は双子と初めから距離を取っており、「鼠」は女の存在が大きくなると自ら切り捨てた。この二人は方法は異なるがどちらも女性を愛することへの恐怖がその背景に存在する。

「僕」が双子との関係に始めから距離を置いていたのは、「直子」との愛とその罪が意識にあつたと考えられる。これが原因で女性を愛することへの恐怖が生まれたのである。

「鼠」に関して、女性を愛することへの恐怖を持つ直接の原因はテクストに具体的に示されない。しかし、先に引用した三角関係の暗喩「あるものは残り、あるものははじき飛ばされ、あるものは死んだ」(2)に続いて、「鼠」が過去の事件の苦悩を忘れる努力をしている場面がある。

もう三年も前のことになる。

時の流れとともに全ては通り過ぎていった。それは殆んど信じ難いほどの速さだった。そして一時期は彼の中に激しく息づいていた幾つかの感情も急激に色あせ、意味のない古い夢のようなものへとその形を変えていった。(2)

時折、幾つかの小さな感情の波が思い出したように彼の心に打ち寄せた。そんな時には鼠は目を閉じ、心をしっかりと閉ざし、波の去るのをじっと待った。(2)

三角関係が提示された場面に続くこの「鼠」の苦悩と女性に対する

恐怖とには看過できない繋がりが見える。つまり、三年前に起こった三角関係によってこの苦悩が生まれているからである。

「1973年のピンボール」には、異常なまでに周囲と孤立し、友人が不在である「僕」の姿が強調されていた。「僕」と「鼠」はどちらも同じピンボール台に夢中になった。「僕」と「鼠」の両方とも女性を愛することの恐怖が描かれている。更に「僕」と「鼠」の章は双方とも三年前を焦点化する構造である。これら、友人の不在、同じピンボールに夢中になったこと、女性を愛することの恐怖から、次のようなことが考えられるのではないか。つまり、「僕」が友人の「鼠」から「直子」を奪い去り、それが原因で「直子」が死んでしまったということがある。そしてそれ故、「僕」が頑なに友人を拒み、周囲からも拒まれる。「家に帰って服を脱ぐたびに、体中の骨が皮膚を突き破って飛び出してくるような気がしたものだ」と感じ、罪の意識から「もう何も欲しがらまい」と決意する。結果として、二人は愛する女性を死なせてしまい、女性を愛することへの恐怖を持つ。ここには三角関係という構図が成立するのである。

三 三角関係の系譜

ここで視点を變えて、「1973年のピンボール」から七年のち、昭和六二年九月に発表された「ノルウェイの森」から少し逆照射してみたい。「1973年のピンボール」と「ノルウェイの森」とは様々な類似点がある。先ず、中心人物である「直子」という名前が一致す

る。村上の作品の中で固有名詞が使われる人物は、「風の歌を聴け」から「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」までの作品全てにおいて「1973年のピンボール」に登場する直子唯一人である。「鼠」や「ジェイ」等はあだ名であり、本当の名は記されていない。「直子」という名前のみが出てくるのである。

名前的一致とともにその人物造形も極めて似通う。直子は日当りの良い大学のラウンジに座り、片方の腕で頬杖をついたまま面倒臭そうにそう言つて笑つた。僕は我慢強く彼女が話しつづけるのを待った。彼女はいつだってゆつくりと、そして正確な言葉を捜しながらしゃべつた。(1969—1973)

「それは本当に——本当に深いのよ」と直子は丁寧に言葉を選びながら言つた。彼女はときどきそんな話し方をした。正確な言葉を探し求めながらもゆつくりと話すのだ。

(「ノルウェイの森」第一章)
また、「直子」は「僕」と1969年に関係を持ち、1970年に死んだという一番重要な筋が一致する。始めに「1973年のピンボール」の用例を掲げる。

直子も何度かそういう話をしてくれた。彼女の言葉を一言残らず覚えていた。

「なんて呼べばいいのかわかんないわ。」(中略)
一九六九年の春、僕たちはこのように二十歳だった。

(1969—1973)
でも忘れることなんてできなかった。直子を愛していたことも。

そして彼女がもう死んでしまったことも。結局のところ何ひとつ終つてはいなかったからだ。(1969—1973)
次に「ノルウェイの森」の例を掲げる。

(引用者注一九六九年) 四月半ばに直子は二十歳になった。(中略) 直子の誕生日は雨だった。僕は学校が終わってから近くでケーキを買つて電車に乗り、彼女のアパートまで行つた。(中略) その夜、僕は直子と寝た。そうすることが正しかったのかどうか、僕にはわからない。(第三章)

(引用者注一九七〇年) 八月の末にひっそりした直子の葬儀が終つてしまうと、僕は東京に戻つて家主にしばらく留守にしますの
でよろしくと挨拶し、アルバイト先に行つて申しわけないが当分
来ることができないと言つた。(第十一章)

更に、「ノルウェイの森」という題名になっているビートルズの「ノルウェイの森」に両作は関わりを持つ。

一人が席を立ててレコードをかけた。ビートルズの「ラバー・ソウル」だった。

「こんなレコード買った覚えはないぜ。」僕は驚いて叫んだ。(7)

飛行機が着地を完了すると禁煙のサインが消え、天井のスピーカーから小さな音でBGMが流れはじめた。それはどこかのオーケストラが甘く演奏するビートルズの「ノルウェイの森」だった。そしてそのメロディーはいつものように僕を混乱させた。いや、いつもとは比べものにならないくらい激しく僕を混乱させ揺り動

かした。(「ノルウェイの森」第一章)

ビートルズの「ノルウェイの森」は『ラバーソウル』に収録されている。他の場面では他人に感情を表すことのなかった「1973年のピンボール」の「僕」だが、双子かかけた『ラバーソウル』を聞いた途端驚いて叫ぶという行動を取っている。「僕」が激しく動揺していることがわかる。そして、「ノルウェイの森」の「僕」は「直子」が自殺して以来、「直子」が好きだった「ノルウェイの森」を聞くと激しく混乱する。この混乱から物語は始まっていく。

このように、「1973年のピンボール」と「ノルウェイの森」とはテキストを支える重要な箇所々に類似点が見られるのである。「1973年のピンボール」における「僕」と「直子」との関係は恋人が自殺したという意味だけではなく、「ノルウェイの森」の重要なモチーフであった三角関係も視野に入れることが可能ではないだろうか。

この三角関係というモチーフは「ノルウェイの森」だけではなく、村上のテキストには継続的に表れている。まず、「ノルウェイの森」の原型として「蛭」(昭和五八年一月)、「めくらやなぎと眠る女」(昭和五八年十二月)という二つの短編が存在する。「蛭」は、「僕」と自殺した「僕」の親友の彼女との交流が描かれており、「僕」と彼女との間には愛情のようなものが芽生えていたが、罪の意識から彼女は精神病院へ入院することになる。「めくらやなぎと眠る女」では、「僕」が自殺した親友と親友の彼女の病院へ見舞いに行ったことを想起する場面がある。その中で彼女が作った童話「めくらやなぎと眠る女」の内容について「僕」と彼女の間には親友よりも深い相互理解があったことが描かれている。これらの三角関係は「ノルウェイの森」の「僕」

と「直子」とキズキの関係と一致する。平成四年十月に発表された「国境の南、太陽の西」では「僕」と妻有希子、初恋の女性島村さんとの愛が描かれ、平成十二年二月に発表された短編「蜂蜜パイ」では、主人公淳平、淳平の親友高槻、高槻の妻小夜子という関係において、淳平と小夜子との愛が描かれている。村上文学において三角関係は、「1973年のピンボール」「蛭」「めくらやなぎと眠る女」「ノルウェイの森」「国境の南、太陽の西」「蜂蜜パイ」という形で一つの系譜をなしているのである。

これまでに「僕」と「鼠」が三角関係にあるという読みが生まれなかった背景には、「風の歌を聴け」「1973年のピンボール」「羊をめぐる冒険」が三部作として読まれてきたことが挙げられる。特に次作の「羊をめぐる冒険」においては、「鼠」の要請によって「僕」が羊を探しに出かけた後、「鼠」の死んだ経緯が語られ、「僕」は「鼠」の死に涙を流すという友情が描かれている。「僕」と「鼠」が親友であるという強固な枠組みが前作の「1973年のピンボール」までその影響を及ぼしていたのではないか。

しかし、見てきたように「1973年のピンボール」内部には「僕」と鼠と直子の物語が描かれている。「1973年のピンボール」は三部作の一つとしての位置づけだけでは不十分であり、「ノルウェイの森」と直接的に繋がる方向性を内在させているのである。

結 朧化された三角関係

このように、このテキストには愛と罪の三角関係「僕と鼠と直子」の物語が封じ込められていると考えられる。しかし、ここで問題となるのは「僕と鼠と直子」の物語が隠蔽されており、断片的なエピソードによってその輪郭が僅かに浮かび上がるという朧化が行われているということである。なぜ三角関係は隠さねばならないのだろうか。村上の次の発言に注目したい。¹⁵⁾

だから今の時代というのは、好むと好まざるとにかかわらず、読者が努力する以上に書き手が努力しなきゃいけないんだという気がするんです。(中略) 小説という形でしか表現することのできない認識システムを読者に提示することだと僕は思う。(中略)

そういう意味では、僕は小説というのはまだ無限の可能性を持ったフィールドだと思っんです。たしかに大抵のタイプの物語は既に書かれてしまったけれど、新しい認識システムを使ってかたつぱしからそれらの物語を洗いなおしていくことは可能なんですよ。

ここでいう「新しい認識システム」という言葉に留意したい。これまでに「1973年のピンボール」が失敗作であるとの評がなされてきた要因は、「僕」の絶望感の内実が曖昧、「鼠」の自意識の病の原因が不明、粗筋が捉えにくいために主題が不明瞭であったことが挙げられる。しかし、このテキストには朧化された形の三角関係が仄めかされていた。愛と罪の三角関係は「僕」の絶望感、「鼠」の閉塞感の内実と有機的に結びつく。つまり、「1973年のピンボール」の主旋

律である、どうしようもないほどの深い淀み、閉塞感、絶望感、愛する女性を死なせてしまった二人の男の物語というフィルターをかけるとその感情はリアルな表現と化すのである。そして、このフィルターをかけることは、これまでの三角関係の物語の歴史から可能なのではないだろうか。その上に立ち最小の表現で「僕」と「鼠」のたとえようもない絶望感を描くという新しい三角関係の物語が描き出されているのである。「1973年のピンボール」は失敗作ではなく、新しい認識システムをもった現代の〈物語〉として再評価できるテキストなのである。

ただし、「1973年のピンボール」には三つの主題が混在している。第一は、これまで言われてきたように「僕」が幻のピンボールを探す〈*see and find*〉の物語、「羊をめぐる冒険」へ繋がる三部作としての物語である。第二は、今井氏や加藤氏が指摘した「僕」のエゴの縮小と「鼠」の自意識の病の様とが交互に描かれていくもの。これは「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」に繋がる物語である。そして、第三は、本稿で強調してきた「僕と鼠と直子」の物語、自殺した恋人との愛を求心力とした、後の「ノルウェイの森」に繋がる物語である。「1973年のピンボール」は、三部作の一つとする位置づけではなく、〈*seek-and-find*〉「羊をめぐる冒険」「ダンス・ダンス・ダンス」、自意識の小説「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、三角関係の愛「ノルウェイの森」「国境の南、太陽の西」という村上文学全てに関わる根本のテキストとなる。ただ、三つの主題の混在がテキストそのものの価値を不明瞭にしたことも指摘できよう。この三角関係の愛を軸とした物語こそがこの「1973年のピン

ボール」の核となるべきであり、そこに新しい認識システムの存在が確認できるのである。

注

- (1) 「読書鼎談」(秋山駿、柄谷行人、日野啓三 昭和55・9 『文芸』)
- (2) 井口時男「伝達という出来事―村上春樹論」昭和58・10 『群像』、中村三春『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』『ダンス・ダンス・ダンス』四部作の世界―円還の損傷と回復」(平成7・3 『国文学』)

- (3) 加藤典洋「新しい喪失感―『1973年のピンボール』」(『イエローページ村上春樹』平成8・10、荒地出版社)

- (4) 今井清人『1973年のピンボール―出口を探しながら―』(『村上春樹OFFの感覚』平成2・10、星雲社)

- (5) 村上春樹インタビュー「物語」のための冒険」(昭和60・8 『文学界』)

*テキストは『1973年のピンボール』(昭和55・6 講談社)による。「ノルウェイの森」の引用は『ノルウェイの森 上・下』(昭和62・9、講談社)による。傍線は私に付した。

(やまね ゆみえ)